

吉田正吉著

「児童—その心理と精神衛生」

尚綱短期大学

本田和子

この本は必ずしも幼児のことだけを取り扱わず、学童期・青年期の問題にも至る所でふれ、むしろ青年期の事例から逆に、幼児の問題をとり上げようとさえしている。それは、序文の中で著者が述べているように、今日の幼児の問題に将来の見通しを与えるための

試みなのである。それゆえに、この本の中での子どもたちは、幼児期という一断片にはめこまれた姿として描かれているのではなく、将来の成人へと発達していくものとして、明確な縦のつながりの下にとらえられている。そして、また、その子どもたちの生活の場としては、いわゆる成人の保護下にある幼児のための生活環境だけが考えられているのではなく、複雑に動いている現実の社会が考慮に入れられている。この本の中の子どもたちは、筆先から生まれた、描かれるための一つの典型ではない。動く社会に生活する具体として、その姿をみせているのである。

第一章「人格形成と社会生活」では、野生児及び著者の扱った事例を基にして、その生育の状況が人格をいかに規定するかを極めて具体的に述べている。とくに後者では、単にその例を示すことによつて問題を提起するだけにとどまらず、治療終了までの経過を示しながら、その随所に心理学的な解

決を挿入し、一人の子どもの生活能力の高まりを跡づけるその記録を読ませることによつて、人間の性格がいかに形成されていくかをしらせている。

第二章「出生後の発達と幼児の心理」では小学校四年生の女兒が、その弟の守りをしながら記した、観察日記が極めて興味深く示され、それを追つて幼児期の心理が説明されている。ついで、世の親たちを悩ませるわがまま・怒り・しつと・うそなどの幼児期の行動が例によつて説かれている。これらの行動を幼児期の心的特性に基づくものとして説明しながらも、それらを助長する要因として、周囲の成人の生活態度や現代社会のあり方を指摘している点、一考に値しよう。

第三章「子どもの問題行動」で著者は事例研究法を説明し、問題児の事例をあげて、前章と同様にその治療経過を示しながら、問題点を探り、診断し、解釈している。ここでも、子どもの問題行動を「問題」とする成人の側の態度

に問題を提起していること、問題行動をその集団生活とのふれ合いの面からとらえていることなど、興味深く読ませるものがある。

最後の章では「精神衛生」をとり上げ、精神衛生の由来・教育との関係など説明したのち、子どもを健全に成長させ、そのゆがみを直すためのその必要性を説いているが、そのような個人に対する心理的な問題の解法のみでは解決し得ぬ客観的諸条件に規定される問題に言及し、精神衛生についての努力は、個人の主体的な側に働きかけるのみならず、主体の規定される客観的条件を見きわめて、その両者の関係を好転させる方向へ向けられる必要があるとしている。

適応の問題は、単なる現在の社会への順応ではなくして、その適応すべき社会のあり方との関係において検討されるべきであるというのが、全体を通じて流れる著者の主張であろう。

博文社発行  
定価二六〇円